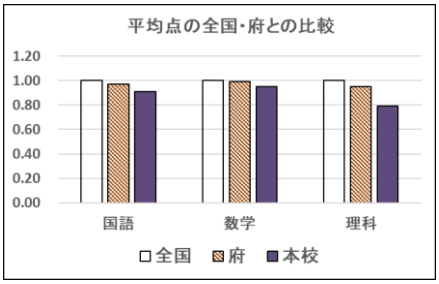
令和４年度　豊能町立東能勢中学校　　学校評価報告書（No. １）

① 設　定 目標	～ つくる ～　学ぶ喜びを感じる魅力ある授業の創造 つけたい力を意識した学習指導の改善
②本年度の取り組み状況	今年度より５・６年生が中学校校舎に移り、前期学部校舎と中・後期学部校舎の施設分離型小中一貫教育校が開校した。令和８年度に９か年の義務教育学校になる前段として西地区に先んじて、小中一貫教育を推進することとなった。三年目となった新型コロナウィルス禍、前例のない運営体制であるが、小学校、中学校の全職員が東能勢小中学校を意識して目標に向かって取り組んだ。 ＜つけたい力＞ ＊どんな変化にも柔軟に対応できる基礎学力 ＊自ら主体的に学ぶ姿勢 ＊他の考えを聞き、自分の考えを深め、表現する力 ＜目標達成のための取組＞ ①　豊能町教育委員会指定研究推進校事業 分離型小中一貫教育校になった初年度として、前期・中期・後期学部でそれぞれの特長や利点を生かして、学習指導方法の工夫と改善に小中学校全体で取り組んだ。 ＜研究テーマ＞ 小中一貫教育で取り組む「学ぶ喜び」と「しなやかな心」の育成 ＜研究方法＞ ・プロジェクトチームの結成　　・指導助言者（山口偉一教授）との打ち合わせ ・小中合同研修会（8 月 3 日、11 月 25 日、12 月 26 日、3 月 27 日） ②　相互授業参観週間（6 月、11 月、1 月に実施） ・前期学部とも連携し、できるだけ小中学校間でも参観できるように設定した。 ・研究テーマに基づき、「授業参観シート」にて評価・コメントを記入して、相互に意見・助言を交流しあった。その後、学力向上担当がまとめて、学期ごとの総括会議で振り返りを行った。 小中合同研修 山口先生の講演 ③　校内研究の成果の発信 ○町教育委員会指定研究授業（11 月 25 日） ・研究授業＝6 年英語科　河﨑　亮太　教諭 ・事後研修＝指導助言　山口　偉一　教授（関西福祉大学） ○法定研修（10 年・5 年研・2 年目研）に係る研究授業 ・10 年経験者研＝9 年保健体育科　関本　昭子　教諭（11 月 10 日） ・5 年経験者研＝7 年社会科　山田　裕士　教諭（12 月 9 日） ・初任 2 年目研＝8 年英語科　中島　佳奈　教諭（9 月 14 日） ④　児童生徒会とともにつくる学習規律・学習習慣 ○長期休業中の補習（5～9 年）・テスト前自習室（7～9 年）・学習クラブ（5・6 年） ・家で集中しにくい児童生徒が、少しでも学校で勉強できるように時間と場所を提供し、自学習やわからないところを質問できる機会を設定した。 ○学習に関するアンケートを活用した振り返り ・全校児童生徒が学習に関するアンケートを毎学期末に実施して、自分自身とクラスの振り返りを行った。グラフに表して児童生徒集会や学級会で発表し、今後の方向性を確認し合った。

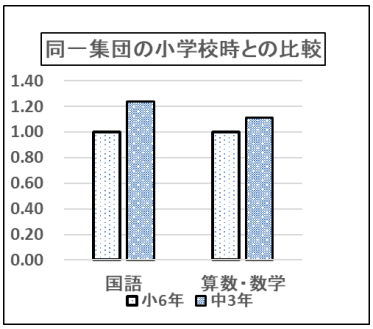
③　学校教育自己診断・授業評価等定量的評価及び定性的自己評価内容

＜全国学力・学習状況調査の結果より＞（令和４年４月 19 日全国の中学校３年生対象に実施）

右のグラフは、調査教科の平均正答率を全国を１として大阪府と本校の割合を表したものである。残念ながら、どの教科においても、全国、大阪府より下回っている。理科は全国平均正答率より、0.21 ポイントも差があった。



生徒質問紙の「学習に対する興味・関心や授業の理解度等」の項目では「各教科の勉強は好きか」の質問の肯定的回答（「好き」「どちらかと言えば好き」）は国語 58.8%（府 60.0　国 61.9）、数学 76.5%（府 58.9　国 58.1）、理科 41.2%（府 62.9　国 66.4）となっている。興味、関心の度合いと正答率の比例的な関係がうかがえる。ただ、「授業内容はよくわかるか」の問いの肯定的回答については、国語　88.2%（府 81.5　国 81.2）、数学 94.1%（府 78.0　国 76.2）、理科 76.5%（府 74.6　国 75.2）と、どの教科も府や国を上回っている。指導方法の工夫改善の効果が表れている。



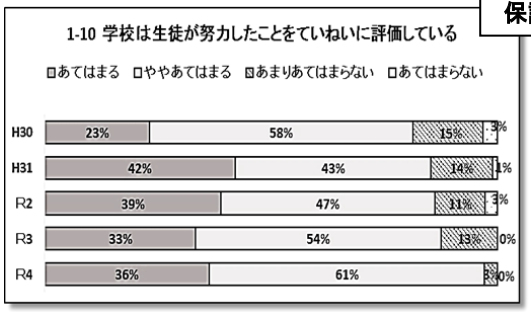
左のグラフは対象の生徒が平成 31 年の小学６年生の時に行われた同調査の結果を１として、正答率がどう変わったか比較したものである。理科の調査はなかった。国語は 0.24 ポイント、算数は 0.11 ポイント上昇している。生徒の成長とともに学力面も確実に伸長したと考えられる。それは、本校中学３年生の日頃の授業に向かう姿勢にも表れている。

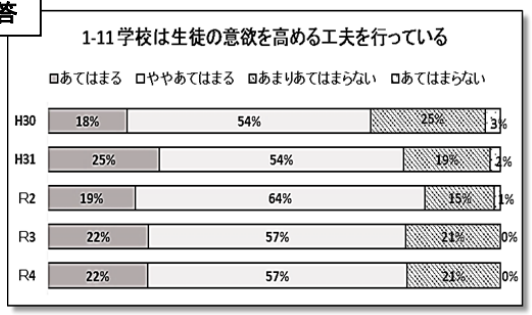
（詳細は、配布及び HP 公表済みの令和４年 11 月 11 日付の調査結果について参照）

＜学校教育自己診断の結果より＞　＊（今年度←昨年度の肯定的な数値）

保護者アンケートの結果において、特に学力向上に関わる項目について肯定的な回答（あてはまる＋ややあてはまる）が高かった項目は、昨年度に引き続き、「生徒が努力したことをていねいに評価している（97%←87%）」（下図）、生徒の意欲を高める工夫を行っている（79%←79%）」（下図）である。一方、「授業が分かりやすいと言っている。（65%←77%）」となっており、前述した全国学力・学習状況調査の生徒質問紙では９年生は「授業内容はよくわかる」と肯定的答えているが、学年によっては、日頃の学習姿勢や定期テストの結果など、授業づくりの工夫改善の効果としてはまだ表れていないようだ。

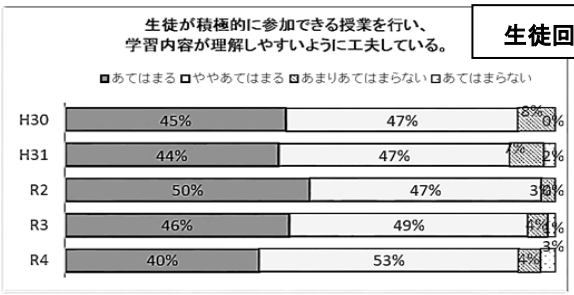
保護者回答

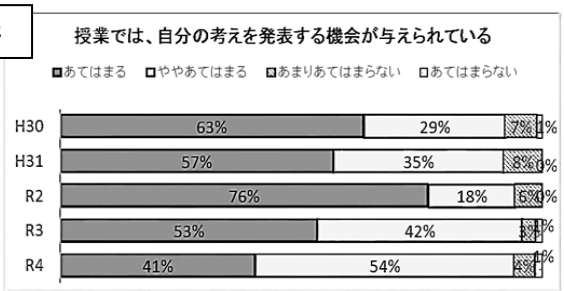




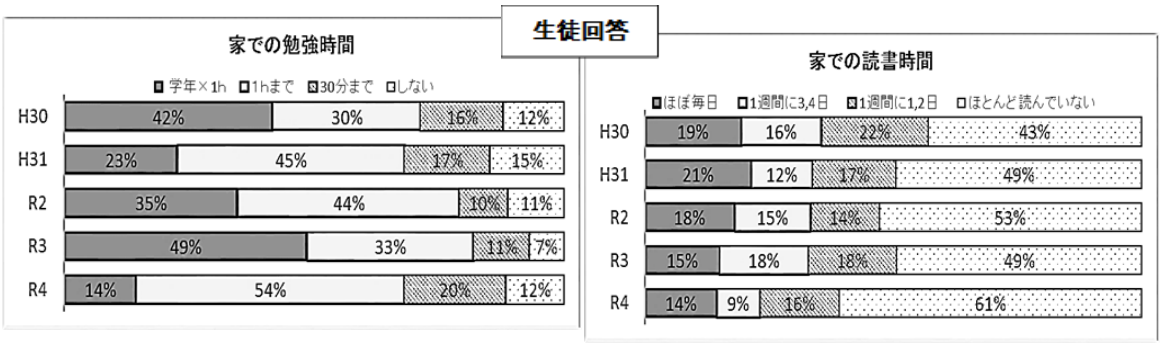
生徒アンケートでは、保護者同様、「生徒が積極的に参加できる授業を行い、学習内容が理解しやすいよう工夫している（93%←95%）」（下左）「授業では、自分の考えを発表する機会が与えられている（95%←95%）」（下右）など、授業の工夫について９割を超える高評価であるが、「あてはまる」という強い肯定的回答の比率が年々下がっている。コロナ禍での制限はあるものの、生徒の実態に正対した指導方法の工夫がなお一層求められる。

生徒回答





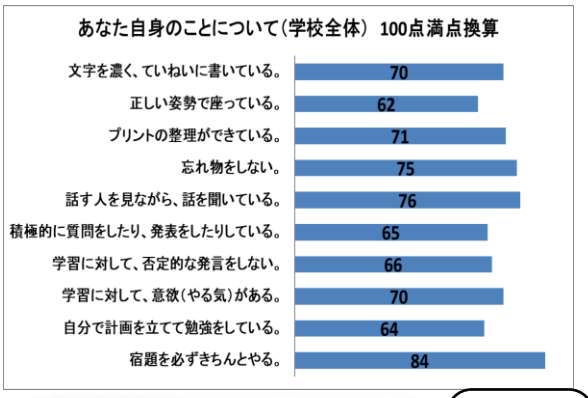
以前から課題である家庭での学習習慣については、大変厳しい結果となった。「学年×1時間」の生徒が昨年度より大きく減少し（14%←49%）、「しない」が増加した（12%←7%）。（下左）
また、「家での読書時間」についても、「ほとんど読んでいない」が増加した（61%←49%）。（下右）半分以上の生徒が家庭で読書をしておらず、その時間がパソコンやスマートフォンなどを使っている時間に取って代わってしまっているのかもしれない。

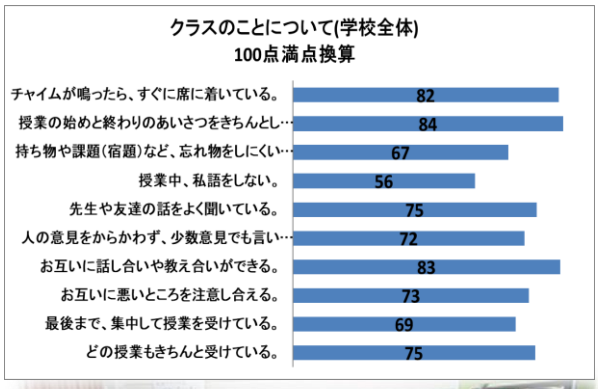


豊能町では読書活動が盛んで、本校でも「うちどく」や「朝読書」などに取り組み、子どもの図書館使用率や読書量は全国的で高い方であったが、デジタル化の時代になり、読書習慣の確立が難しくなってきている。

＜児童生徒会の学習アンケートより＞

下のグラフのように自分自身について今まででも最高で、項目の中でも高得点であったのは「宿題をかならずきちんとやる」であった。長期休業中の宿題や提出物について、なかなか課題を解消できない生徒が毎年いるが、その割合が減少して、「やるべきことはきちんとやろう」という姿勢になってきているのは喜ばしいことである。休業中の補習や生徒会の「テスト前自習室」の取組も効果的だったと言える。町教育委員会主催の「まなび舎教室」への登録も全校生徒の 54%と高い参加率である。将来的に、自分を律しながら自ら学ぶ力をつけるには家庭学習の習慣化は非常に大切ではあるが、本校の生徒は、家庭でそれぞれが学習するよりも環境や仲間がいると学習意欲も出るという生徒が多い。だからこそ、学校教育の中での学習の機会と時間を充実させなければならない。





理科の交流授業：７年生が５年生に顕微鏡を教える

上：総合で８年生が５，６年生に SDGｓの発表をする
左：児童生徒会の自習室

④　学校関係者評価　（学校協議会等からの提言）

〇前期・中期・後期相互に授業参観を行い、振り返られたことは、小学校教員から中学生、中学校教員から小学生を見ることで、これまでとは違った角度から子どもたちを見ることができると考えられ小中一貫の良い面だと考えられる。これからも進めてほしい。
〇今年からの 5・6 年生の教科担任制の授業は子どもたちにとって新鮮ではないだろうか。引き込まれるような授業の工夫がなされることを願う。
〇5・6 年生が中学校へ移動するという特例の授業に、先生方の努力を感じる。全国学力調査の結果は残念なものかもしれないが、児童生徒会とともに学習に取り組むなど評価に値する。
〇設定目標に向け、教科書通りの授業ではなく、生徒の興味を集められるよう努力されている。
〇相互授業参観は、縦のつながりも育成できるので、評価できる。
〇長期休業中の補習やテスト前自習室、学習クラブなど家庭で学習に取り組みにくい子どもたちに学習できる場の提供をしていることは評価できる。ただ、最終的に自分一人での学習が必要になると思うので家庭にも協力をお願いしたい。
〇子どもを巻き込んで長期休業中の補習・テスト前自習・学習クラブ等、学校で時間と場所を提供した取り組みが良かった。
〇学習に関するアンケート実施後、振り返りやグラフ化して今後の課題や方向性を確認しあう取り組みは良い事である。

●読書量が少ないと結果が出たようだが、新聞を読んだり辞書を開いたりして活字に触れる機会を家族で持つことで語彙数の増加や表現方法も身につくのではないか。
●朝読書の取り組みは評価できるも、目標設定（課題図書・目標冊数等）が必要である。
●学力を上げたいと生徒も保護者も願っているのにその方法がわからない、との声が聞こえてきそうな返答だと思う。
●家庭学習の習慣をつけるために、保護者との一層の連携が必要である。
●家での勉強時間が「30 分まで（宿題だけ？）」「しない」が 3 割と増えているのが驚きで残念。スマホや PC を使用している時間が長く、6 割がほとんど読書してないにつながっている。
また、4 割が使い方について自分に任されていて、話し合ったりしていない。これも驚きである。保護者への働き掛けも必要である。

☆これからの社会は学歴だけがものをいう時代ではなくなっていくと思う。どう生き抜くか、どんな人生を送るか、その為になにをするか。個人個人が考え、行動する ことが大切で、それを実現する ための基礎を培う大事な時間だと思う。勉学の為の基礎的な姿勢を小学校で養い、個人の力を中学校で発揮できて成長していける。そんな流れが一貫校で実現することを期待したい 。
☆一人で学習する方法を具体的に子どもたちに示す取組を進めてほしい。
☆家庭でのルール作りは学習面だけでなく生活面でも大事なことなので、ご家庭での環境づくりをお願いしたい。

小中合同校内研修

相互授業参観・研究授業

令和４年度　豊能町立東能勢中学校　　学校評価報告書（No. ２）

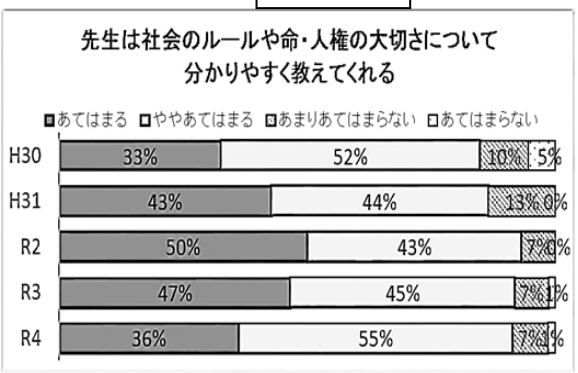
① 設　定 目標	～ はぐくむ ～ しなやかな心と体の育成 豊かな心の育成のための活動
②本年度の取り組み状況	With コロナが３年目になり、毎日の健康観察や感染症対策を続けながら、目標達成に向けた教育活動を、予定通り実施することができた。小規模校の利点、地域や保護者の協力、関係機関の支援、校種や学年を超えた教職員間の連携があってこそ実現できた。 ＜育てたい資質＞ ＊自己を大切に、他者を思いやり、互いの個性や違いを尊重する心 ＊多面的・多角的に考え多様性を生き抜く豊かな人間性 ＜目標達成のための取組＞ ①　総合的な学習の時間・学級活動における集団づくり、人権意識を高める各学年の取組 ＜７年＞　集団づくり、防災・環境学習（校外学習　防災センター）、＊SDGｓ、キャリア学習（職場訪問）等 ＜８年＞　キャリア学習（職場体験学習）、SDGｓ（校外学習　JICA 関西）等 ＜９年＞　体験学習（修学旅行　福井方面、）SDGｓ、キャリア学習、保育体験、国際理解学習（留学生とリモートでの交流）等 **＊SDGｓ＝Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）とは**、地球の環境問題、経済格差や貧困、紛争など 2030 年までに解決の達成をめざして国連総会で採択された 17 の目標。本校ではグローバルな視野で世界の課題を知り、目標達成にむけてより良い未来をつくるため、何ができるかを考え、行動に移していくことを学ぶ取組を行っている。 ②　児童生徒理解、相談体制、情報共有の体制 ・日本語支援の必要な生徒への対応＝支援教員、日本語支援員・通訳(阪大中国留学生)の配置 ・個別の問題、家庭の課題への支援＝児童生徒支援加配教員・心の教室相談員の配置 ・生活指導連絡会（＝いじめ・不登校対策委員会）（毎週火曜日）：児童生徒理解・問題行動把握…前期校舎からも管理職、生活指導担当教員が参加して小中合同で情報共有 ・ミニ懇談（8 月、11 月、2 月）の開催：生徒の不安や悩みを聞く、学校生活状況を把握 ・生活アンケートの実施（毎学期）：いじめ・不登校の初期対応、結果分析・検証に生かす ・心の教室相談員、スクールカウンセラー、教育専門主事（適応指導教室）、専門機関（こども育成課・子ども家庭センター・スクールサポーター）との連携 ③　小中連携を意識した学校行事および児童生徒会活動 ・全教員によるローテーションの道徳授業 本校では、全員で取り組むことが定着してきた。「特別の教科道徳」としても 4 年目を迎え、その間、評価についての研究や研修も行ってきた。今年度はこのローテーション道徳を小中で実施した。 ・連携や合同で実施する学校行事：東能勢フェスタ（舞台の部・展示の部）、合同運動会 ・児童生徒合同の委員会活動 役員会・代議員会・選挙管理委員会、文化委員会、保体委員会、生活委員会、放送委員会に分かれて活動。放送や図書など日常の活動や行事などにも 5 年生から 9 年生まで学年を超えて関われる場面を設定した。 ・6 年生部活動体験（11 月 10 日） 月に 1 回の小学校クラブ活動は、前期学部校舎に移動して 4 年生と交流しながら行っている。中学校舎にいることで中学生の部活動は身近なものになっているが、日常的な活動への参加は 7 年生になってからであるので、事前にすべての部活動を体験する機会を設定した。

③学校教育自己診断・授業評価等定量的評価及び定性的自己評価内容

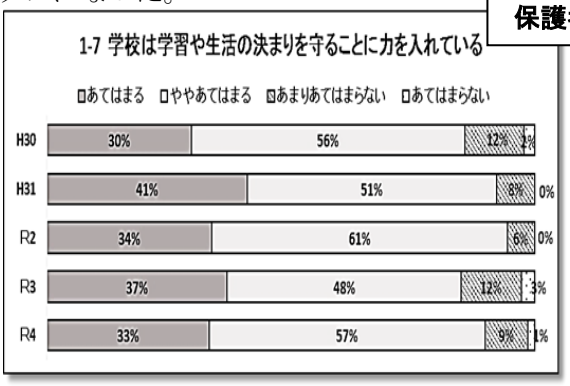
＜学校教育自己診断および生活アンケートの結果より＞

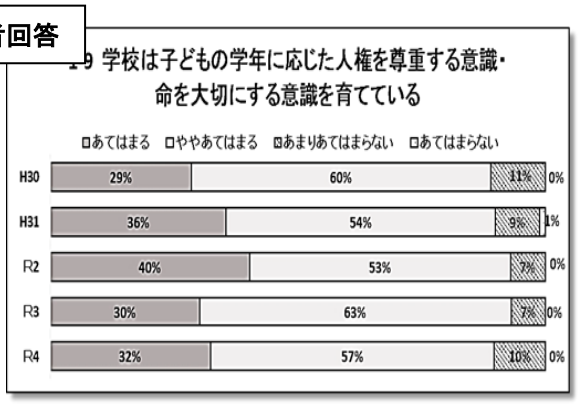
集団づくりや人権学習を意識した取組に関連する生徒への項目「先生は社会のルールや命・人権の大切さについてわかりやすく教えてくれる」は、肯定的回答が昨年度とほぼ変わらず 9 割を超えていた。（91%←92%）しかし、強い肯定の「あてはまる」は 10%近く下がっている。（36%←47%）（右図）関連する保護者への項目「学習や生活の決まりを守ることに力を入れている」や「子どもの学年に応じた人権を尊重する意識・命を大切にする意識を育てている」については以下のようなグラフになった。

生徒回答



保護者回答





全国学力・学習状況調査（全国学調）生徒質問紙や本校で毎学期末に行っている生活アンケートの「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」の項目について、「そう思う」の回答の比率が全国や府に比べてやや低かったのが課題であったが、9 年生対象の全国学調では、一昨年度（61.8%）、昨年度（73.9%）と年々上昇し、今年度は 82，4%で府（81.6%）を上回った。全校生徒対象の 2 学期末の生活アンケートでも 93%であり、ほとんどの生徒が「いじめはどんなことがあってもいけない」という認識ができてきた。

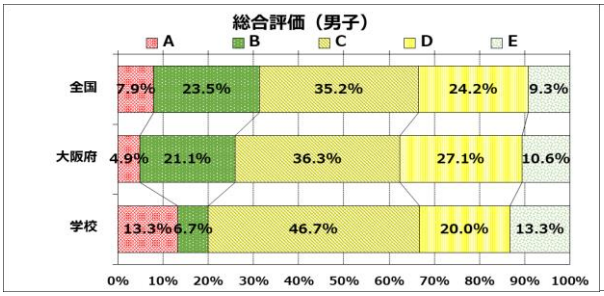
児童生徒会等の活動については、今年度から 5 学年での活動に広がったことから、「児童生徒会・委員会活動・部活動に積極的に取り組んでいる」の「あてはまる」が上昇している。（42%←37%）生徒の「先生は悩みや相談事をしっかり聞いてくれる」の肯定的回答が 85%、保護者の「教職員は子どもの意見や悩みをしっかりと受け止めている」の肯定的回答も 82%と高く、小規模校だからこそできる生徒理解と丁寧な対応が効果に表れているようだ。今後も相談体制を整え、速やかな支援・連携に努めていきたい。

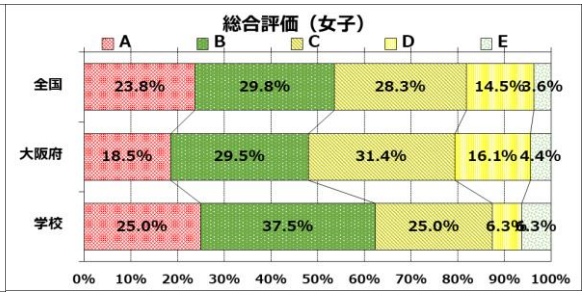
＜全国体力・運動能力調査およびとよのチャレンジ体力テストの結果より＞

8 年生を対象とした全国体力テストで大阪府は全国平均を下回ったが、本校は全国を 50 とした場合の T 得点において、男子 49.7（府 48.7）、女子 50.6（府 48.6）であった。男子は上体起こしとシャトルラン、女子は上体起こしと反復横跳びが全国を上回った。

7 年生と 9 年生について、とよのチャレンジの体力テストの結果でみると、総合評価 A を占める割合がどちらの学年も男女とも全国より少ない。特に 7 年男子は、体力・運動能力面に課題が見られる。

8 年　体力・運動能力調査の総合評価





④学校関係者評価（学校協議会等からの提言）

○普段から生徒の悩みや相談事を聞いているという質問に肯定的な意見が年々増加していることは評価できる。今後も取り組みを進めてほしい。
○5・6 年生を迎え、大きく変化した 1 年だったと思うが、児童生徒会、クラブ、運動会など連携できる部分から取り組みを始めていることは評価できる。
○難しい年代の生徒たちの多くが、学校の先生が話を聞いてくれている、と答えていることを嬉しく思う。
○生徒とのミニ懇談は、良いと評価できる。
○全教員のローテーション道徳授業の取り組みは、素晴らしい。大変なことだと思うが、更に継続して欲しい。

○小規模校の利点を活かした様々な取り組みは素晴らしい。先生方のきめ細やかな配慮を感じる。
○5・6 年生が移動してきたことで学校行事も様変わりしたが、うまく受け入れ体制を整え 、行事を遂行されたと思う。先生方の努力は勿論素晴らしいが、子供たちの柔軟さにも驚いた。
○「児童生徒会・委員会活動・部活に積極的に取り組んでいる」のアンケート結果があがっていることが良かった。このような積極性は今後の進路や人生において良い影響を及ぼすと思う。中学生がその姿勢を示すことで、小学生がもっと影響を受けてくれることを期待する。
○教職員の児童生徒への対応の評価が、生徒、保護者ともに良い結果なのは良かった。先生方の努力を感じる。

●小規模校の為、運動クラブの少なさが影響しているのではないだろうか？　少人数でできる運動クラブの検討が必要である。
●中期の集団をどう育てていくのかが今後の課題だと感じる。どうしても小学 6 年と中学 3 年を最高学年ととらえがちだが（国のシステム上抜け出せないこともあるが）小中一貫４，３，２制の強みを出すためにも中期集団の研究を深めてほしい。
●学校は様々な行事の中で命の大切さなどを伝えられているようだが、生徒には強く感じられていないことが残念。
●「何でも話すことができる友達がいる」で 19%があまりあてはまらないと答えているのが気になる。

☆今後ますます複雑化する社会の中で、外部からのサポートは何が出来るのか、学校運営協議会で協議することが大事になってくると思われる。
☆SDGs の取り組みがもっと中学校から地域に発信し実現可能になっていけたらいいと思う。
☆5～9 年生での行事は、先生方には初めてで悩ましいことだったと思うが、子どもたちにとって経験が今後の宝になるので、ぜひ継続していただきたい。

小中合同運動会

東能勢フェスタ舞台の部

① 設定 目標	～ つながる ～　保護者･地域･保幼小との連携 家庭･地域との信頼関係の構築 ・ 保幼小中の連携
②本年度の取り組み状況	今年度より学校運営協議会が発足し、本校はコミュニティ・スクールとして初年度を迎えた。また、小中一貫教育校になることで PTA 組織も小中が合体し、一つの組織になった。校区の児童生徒と地域を結ぶ行事として、青少年育成協議会主催のミニスポーツ大会が 2 年ぶりに実施された。 ＜目標達成のための取組＞ ◆家庭・地域との連携 ①　コミュニティ・スクール（CS）の発足　***＊町教育委員会事務局小中一貫教育推進室の支援のもと実施*** ・学校運営協議会の開催　年 12 回、義務教育学校開校準備委員会との連携 ・研修：顧問　小松郁夫先生（京都大学特任教授）の講話・支援助言 先進校視察見学（京都大原学院） ②学校行事、環境整備、教育活動に係る保護者・地域支援 ・小中合同運動会（10 月 8 日） 初めての小中合同運動会において、従来の受付や駐車場管理、広報取材以外にも、コロナ禍での対策としてリストバンド導入による人数管理や場内整理、会場整理など多大なご協力のおかげで合同運動会が成功の裡に実施できた。 ・草刈り週間・大作戦（7 月 2 日、9 月 10 日、28 日、30 日、10 月 4 日） PTA、地域学校協働活動推進員が中心となって企画・招集をして、地域の方々、保護者、生徒および教職員が土曜日に集まり、草刈りを行った。すっきりした校庭で運動会を迎えることができた。 ・植栽活動、収穫・制作活動 地域学校協働活動推進員と児童生徒会の呼び掛けで地域サポーター、保護者とともに季節の花の植栽を行った。収穫物で恒例の梅ジュースを作った。 ***★生徒と地域との交流についてサンケイリビング新聞社の冬号に掲載されました。*** ③東能勢中学校区青少年育成協議会主催ミニスポーツ大会（10 月 23 日） ・コロナ禍で 2 年間中止していたが、今年度は内容や条件を変更して、本校を会場として実施した。本協議会には校長、関本教諭、山田教諭が運営委員として参加し、事前の会議で準備をすすめた。感染症予防のため、飲食のコーナーは設けず、参加景品を充実させた。また、恒例のドッジボールに加え、ボッチャを取り入れた。当日は 209 名の参加者でにぎわった。 ◆保幼小中連携の充実 ①小中交流授業教科担任制 ・5・6 年の教科担任制導入、加配や両校種の免許所持教員により実施 中学校⇒小学校：算数・英語・家庭　　小学校⇒中学校：音楽・理科・社会 ②コラボ授業　　中期学部の育成をめざして ・理科：7 年生が 5 年生に顕微鏡の使い方を教える（9 月 15 日） ・総合：7 年生の防災学習のまとめを 6 年生に発表する（11 月 14 日） ・総合：8 年生の SDGｓ学習のまとめを 5・6 年生に発表する（1 月 20 日）

③小中一貫教育を意識した行事

・東能勢フェスタ舞台の部・展示の部（中・後期学部）、小中合同運動会、ふたば園との交流（運動会、保育・職場体験、英語活動）・地域サポーターとの交流（植栽、美化活動）

③教職員合同研修会

前述（No.1）したように、町教育委員会研究校として指定を受け、姫路市立白鷺小中学校初代校長を務められた山口偉一先生を指導助言者に迎え、合同研究を行った。（No.1 参照）

④東地区小中学校運営会議（毎月１回　町教育委員会事務局主催）

・小中両校の校長・教頭が参加し、小中一貫教育校、コミュニティ・スクールとしての進捗状況を交流し、令和８年度の義務教育学校設立に向けた課題解決のために検討・協議した。

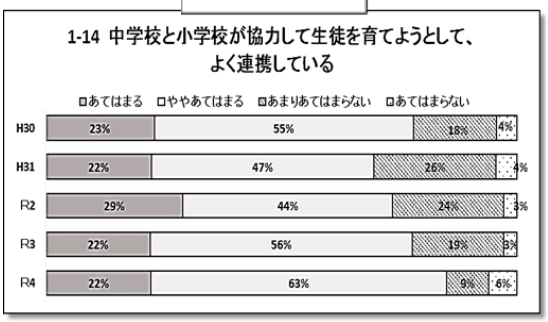
③学校教育自己診断・授業評価等定量的評価及び定性的自己評価内容

＜学校教育自己診断の結果より＞

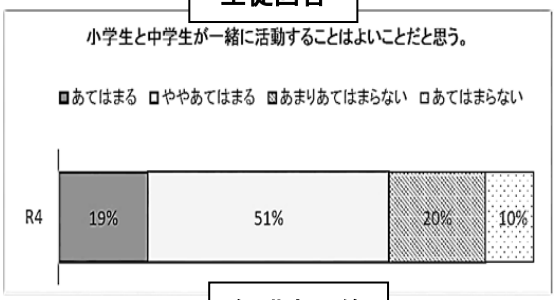
右の保護者項目「小学校中学校が協力して生徒を育てようとよく連携している」の経年比較のグラフを見ると、肯定的回答（あてはまる＋ややあてはまる）が、昨年度の 78%から 85%とさらに上昇した。小中連携を意識した取組が一定評価されつつあると思われる。

また、今年度は小中一貫教育校開校初年度の検証のためにアンケート項目を新しく追加した。右図は関連する質問項目を生徒・保護者・教職員と並べたものである。それぞれの肯定的回答は、生徒「一緒に活動することはよいことだと思う（70%）」、保護者「一緒に学校生活を送ることや行事を行うことは、子どもたちの成長につながっている（81%）」、教職員「合同で学校行事をすることは児童生徒の成長につながっている（96%）」であった。それぞれの立場で、課題や不安はあるものの、小中一緒に教育活動を行うことは概ね肯定的にとらえられている。それは、別の質問項目、生徒「授業などで多くの先生が関わってくれることは、よいことだと思う（86%）」や保護者「5・6 年生が教科担任制になったことは、学力向上につながっている（77%）」の結果からもうかがえる。

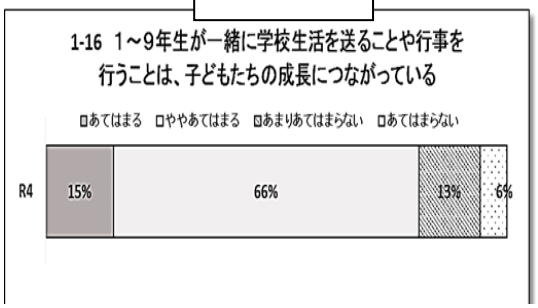
保護者回答



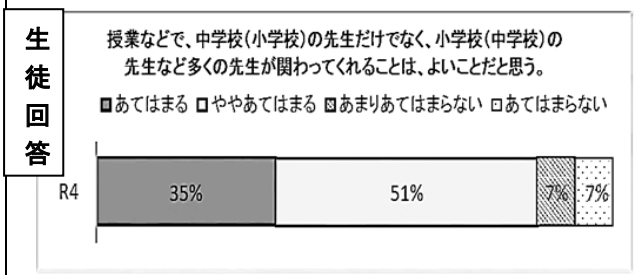
生徒回答



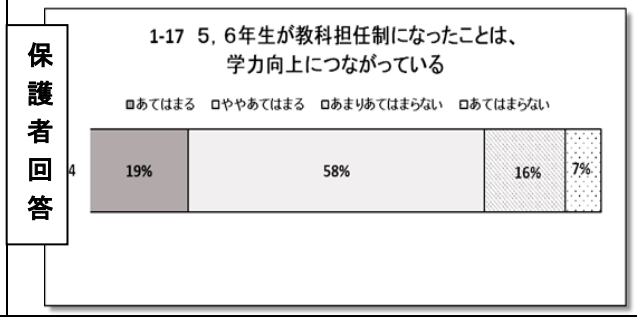
保護者回答



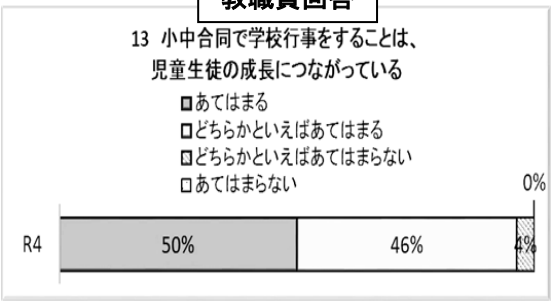
生徒回答



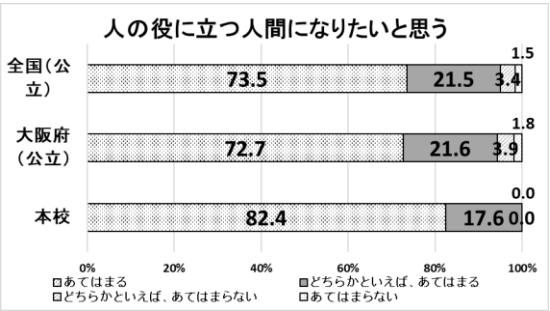
保護者回答



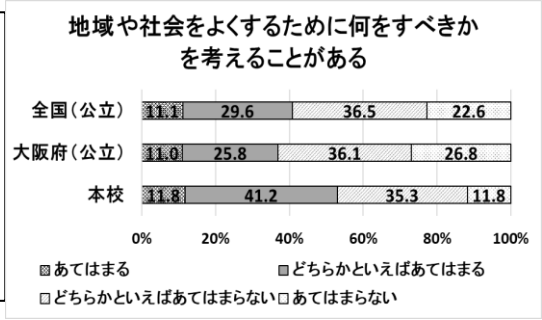
教職員回答



しかし、1～4 年生までの前期学部と 5・6 年生が中学生と同じ校舎である中・後期学部の分離型であるため、一貫校を運営していくうえで大きな課題もいくつかあった。例えば、合同運動会は 1 年生から 9 年生そしてふたば園児の参加もできて、結果的には成功した。しかし、土曜日開催であったために、部活の公式戦があって参加できなかった生徒がいたり、引率などで運動会当日は学校で勤務できない教員がいたりした。また、進路関係の行事を変更せざるを得ない事態にもなった。コロナ禍の問題も加えて、練習期間、校舎間の移動や時間配分の問題があり、従来の小学校運動会や中学校体育祭と比較すると、規模が縮小され児童生徒の出場回数が限られた。また、校舎が分離しているという物理的な隔たりは、報告・連絡・相談のタイムラグや共有の難しさにつながった。特に、5・6 年団の小学部や一人職の養護教諭、事務職員、図書館司書にとっては、想定外の問題や課題が出現した。放課後や長期休業の時間を利用して、小学校校舎と中学校校舎の担当者や管理職と打ち合わせを重ね、教育委員会事務局からの助言や支援もいただいた。合同運動会については、校内の運動会実行委員会を中心に小中全職員で総括し、保護者アンケートも行った。開催方法や開催時期についてなど丁寧に協議検討を行った。今年度の振り返りで確認した諸問題に対応しながら、来年度は平日に小中学校で第 2 回合同運動会を成功させたい。

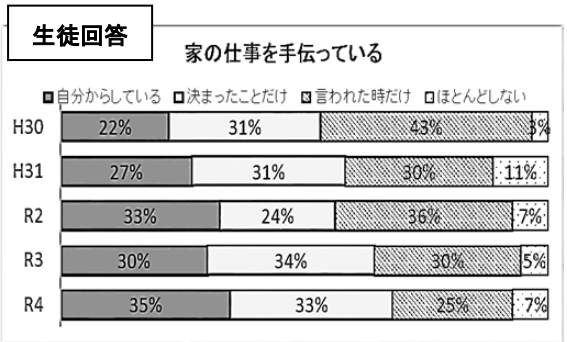


全国学力・学習状況調査

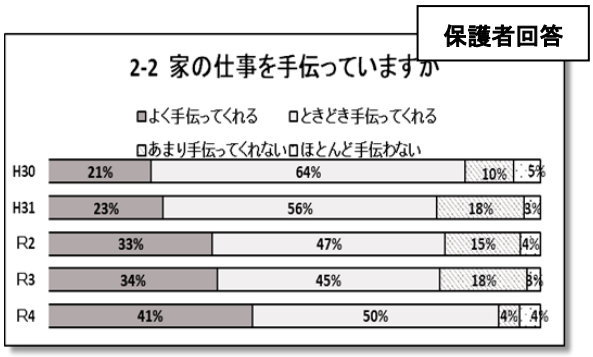


上のグラフは家庭、地域との連携に関連する調査項目として、全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の「人の役に立つと思う」（左図）「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」（右図）の結果グラフである。どちらも本校の肯定的回答が全国や大阪府を上回っており、家族や地域の為に役に立ちたいという気持ちを持っている生徒が多いと思われる。それは、学校教育自己診断の生徒項目「家の仕事を手伝っている」の肯定的回答が上昇している数値にも表れている。（68%←64%）同様の保護者項目「家の仕事を手伝ってくれますか」でも肯定的回答が 9 割を超えており（91%←79%）、子どもの家庭での役割を保護者も評価している。（下図）

生徒回答



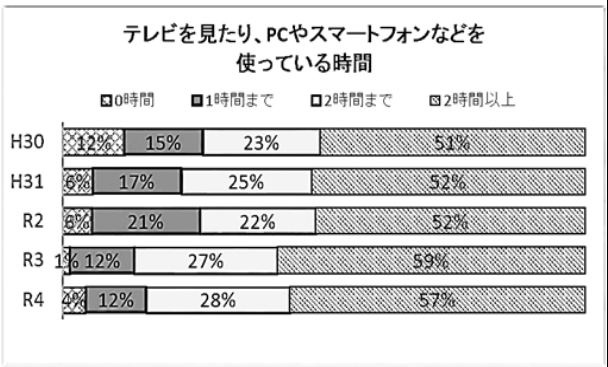
保護者回答



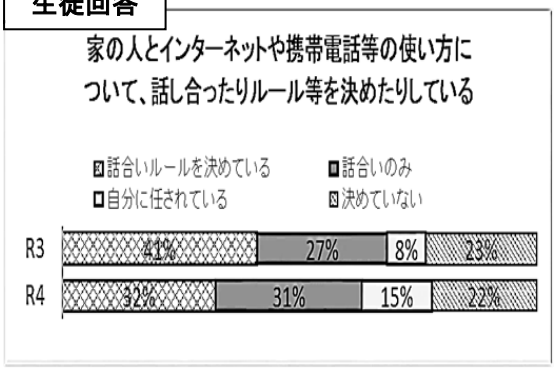
保護者へのアンケートで、子どもに個人のスマートフォンやパソコンなどを持たせているかどうかの項目では、持たせている（71%←75%）、持たせていない（19%←7%）、親と共有している（10%←18%）であった。もはや 7 割の生徒が自分のデジタル端末を持っている。

右図は、生徒アンケートの「テレビを見たり、PC やスマートフォンなどを使っている時間」の質問項目の結果である。昨年度に引き続き、1 日 2 時間以上使用していると答えている生徒が 6 割近くいる。

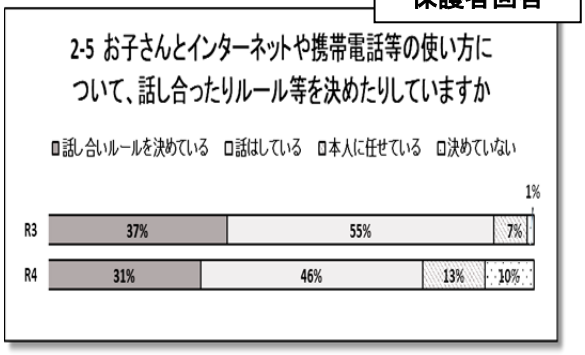
家庭でのインターネットやデジタル端末の使用上のルールを決めたり、話し合ったりしているかの項目で、「決めている」が生徒回答 32%、保護者回答 31%であった。昨年度よりも下がっている。（下図）



生徒回答



保護者回答



学校でも一人一台のタブレット端末を授業で使い、リモートで家庭学習にも使用できるようになってきている。大変便利で、今後ますます使用頻度が高まるだろう。一方、デジタル端末の使用については、使い方を誤ると基本的生活習慣や健康面、学習面などに影響を及ぼし、事件や犯罪に巻き込まれる可能性もある。ネットトラブル防止やモラル、使用ルールについては学校だけではなく、家庭や地域と連携・協力を持って啓発していかなければならない。

④学校関係者評価（学校協議会等からの提言）

○中期学部でのコラボ授業は 7 年生を中期のリーダーとしての活躍の場と位置付けられていて評価できる。今後も 7 年生が中期のリーダーとして育っていってほしい。
○保幼小中連携についての理解が定着してきたようで、肯定的意見が多く良いことだと思う。
○「地域や他人のために役に立ちたい」というのは自己肯定感の表れと思われてうれしく思う。
○コラボ授業は、大変よく、評価できる。
○合同運動会の成功は評価できる。
○分離型一貫校が始まり、学校・保護者・地域の力が結集して合同運動会が行われ園児・児童・生徒が楽しめたと思う。
○コラボ授業の取り組みも、人前で発表したり教えたり伝えたりする事は自分自身の学びにつながると思う。
○保護者からの小中学校の連携に対する評価が良かったことに、安心した。初めての試みの中、両学校の先生方の頑張りは大いに評価したい。
○初めて試みた行事で問題点が見えてきたのも分かった。
○保護者アンケートの「小中学校が協力して生徒を育てようとよく連携している。」の評価が高くなっているのは明るい兆しである。
○9 割の保護者が「子どもが手伝ってくれる」と評価しているのが嬉しい。

●家の仕事を手伝っている生徒が年々増加している。よいことだと思うが、勉強への影響はないのか心配である。
●スマホの使用については保護者や地域も巻き込む形で取り組みを進めていく必要があるように感じる。学校運営協議会でも課題ととらえたい。
●「小中一貫教育校になってよさを感じる。」で 6 割の保護者が「あまりあてはまらない、あてはまらない」と回答している。始まったばかりなので厳しい評価だが、これから良さを発信していけばいい。
●デジタル端末の扱いについては、避けて通れないので、保護者との連携をより強くし、協力体制が必要と思う。

☆保幼小中（0 歳～15 歳）の子どもたちの引き継ぎや育ちの伝え合いを丁寧にしてもらいたい。そうすれば、それぞれ育ちの時期にみられる子どもたちの姿が共有できるのではと思う。
☆デジタル機器がすべて悪いものではないが、やはり危険にさらされているということを子どもたちも保護者ももっと理解するべきである。個人情報の流出、ネット情報の妄信、身体的影響も小さくない。
☆PC やスマホの使用時のルール等家庭の問題だと思うが、学校からの情報も流し、問題や健康被害にならないように啓発活動は何らかの形で継続して欲しいと思う。
☆報告書にもあがっている運動会に関して言えば、周囲の保護者に何人かに聞いてみたが、平日開催でいいのではないかという意見が多かった。今の社会では、有給休暇を使うことは権利として確立しており、恐らく保護者の平日見学に関してはハードルが低いと予想される。生徒が全員参加出来ることの方が意味がある。

上　左：保育体験　中：梅ジュースづくり　左：コスモスの小道づくり
下　左：雪の中で元気にいっしょに遊ぶ小中学生　右：JICA 関西へ校外学習

学校関係者による評価について

○：高評価　　●：課　題　　☆：提　言